

働きつつ学ぶ権利を担う経済科学の総合雑誌

# 経済科学 通信

2006. 6 No.110

1981年5月20日第4種郵便物認可  
ISSN 0385-065X



## 人間発達の経済学の継承と発展

偽装景気／イラン核問題／  
SNSにおけるコミュニケーション

# 経済科学通信

Letters of Economic Science

第110号 (2006年6月)

## NEWSを読み解く

|                       |       |    |
|-----------------------|-------|----|
| 偽装景気                  | 増田 和夫 | 2  |
| 誰も望まないイラン攻撃の帰結        | 形岡亮太郎 | 9  |
| SNSにおけるコミュニケーションと情報評価 | 梶原 太一 | 12 |

SPECIAL EDITION  
特集

## 人間発達の経済学の継承と発展

|                                     |       |    |
|-------------------------------------|-------|----|
| 特集解題：人間発達の経済学の継承と発展                 | 中谷 武雄 | 17 |
| 人間発達の経済学の到達点と課題                     |       |    |
| —『人間発達と公共性の経済学』（桜井書店）をめぐって—         | 森岡 孝二 | 18 |
| 「人間発達の経済学」をどう発展させるか                 |       |    |
| —唯物論的アニミズム（＝弁証法）の世界観のうえで—           | 藤岡 惇  | 26 |
| 読書ノート：現代における人間発達と公共性の課題を考える         |       |    |
| —池上惇・二宮厚美編『人間発達と公共性の経済学』（桜井書店）を読んで— | 碓井 敏正 | 35 |
| 「人間発達の経済学」とマルクス・労働運動・セン             | 石川 康宏 | 42 |
| 人間の全面的発達理論                          |       |    |
| —マルクス経済学の西側経済学に対する優越性—              | 許 崇正  | 48 |
| 書評                                  |       | 55 |

スーザン・ジョージ著 杉村昌昭／真田満訳『オルター・グローバリゼーション宣言』／社会経営学研究会編『関係性と経営—経営概念の拡張と豊富化—』／角田修一著『「資本」の方法とヘーゲル論理学』／稲葉振一郎著『「資本」論—取引する身体／取引される身体』／大西広編著『中国はいま何を考えているか ナショナリズムの深層』

## 勤労・実践を捉えかえす学び(7)

|                 |      |    |
|-----------------|------|----|
| 「ゼミナール」の大切さと楽しさ | 小野 満 | 65 |
|-----------------|------|----|

## 誌面批評

### 現実調査と古典研究

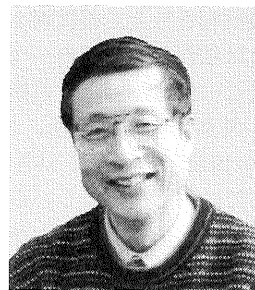
|                     |      |    |
|---------------------|------|----|
| 二つの基礎に深く根ざした基礎研を創ろう | 藤岡 惇 | 69 |
|---------------------|------|----|

# 「人間発達の経済学」をどう発展させるか

## — 唯物論的アニミズム (=弁証法) の世界観のうえで

「……近代科学の実証と求道者の実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。……正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」  
(宮沢賢治『農民芸術概論綱要』)

「人々の中に行き 人々と共に住み 人々を愛し 人々から学びなさい。人々が知っていることから始め 人々が持っているものの上に築きなさい。しかし本当にすぐれた指導者が仕事をしたときは その仕事が完成したとき人々はこう言うでしょう。我々がこれをやったのだと。」  
(晏陽初, 中国の地域教育家)



FUJIOKA Atsushi

藤岡 惇

基礎研編『人間発達の経済学』が刊行されたのが1982年であった。その12年後の1994年に同じく基礎研編で、続編として『人間発達の政治経済学』が刊行された。この第2作は、1991年のソ連邦の崩壊という大事件を念頭において編集されていた。それから11年をへた2005年夏に、池上惇・二宮厚美編で前2著の続編として、『人間発達と公共性の経済学』が刊行された。この第3作は、ブッシュ政権による新帝国主義的なイラク戦争の開始、日本における小泉政権による新自由主義的な「構造改革」の強行といった新たな事態を念頭において編集されている。私は、第1作と第2作の執筆には参加しなかったが、第3作目の執筆には参加することになった。

編集責任を担った二宮厚美さんの表現を借りると、第3作目には論点が多様化し、「ソロ奏者の競演の趣き」があるという。この評価は正しいと思う。したがって本稿も、「個人のソロ報告」でしかないことを了解していただきたい。

一点補足すると、私が関わってきた基礎研自由大学院の「人間発達ゼミ」は、昨秋に創立30周年

を迎えた。「エコロジカルな人間発達を考える」というのが、最近のゼミのテーマであり、この30年の間に開催したゼミの回数は、500回近くにのぼる。本稿は厳密に言うと、私の個人的意見というよりも、ゼミ生とともに作り出してきた共同作品だといったほうが正確だ。ただしありうべき誤りは、私の個人責任に属することはいうまでもない。

### I 「人間発達の経済学」の魅力とは何であったか

これまでマルクス経済学系の文献では、変革主体の形成(人間発達)の必然性は、経済学の理論からは説きえないので、経済理論からは切り離すべきだという主張(主体形成の主観主義=宇野弘蔵氏の理論)と、資本主義のもたらす貧困化は必然的に変革主体の形成をもたらすという主張(主体形成の客観主義=正統派)に分かれていた。ただし後者のばあいも、ロシアや中国の革命をモデ

ル視する傾向が強く、生活の窮乏化が、即、革命をもたらすといった「窮乏化革命」論を唱えるだけの論者が多かった。軍隊的な組織原理に準じて革命政당을建設したことともかかわって、階級や民族は問題にするが、個々人の人間の発達をどう保障するかといったテーマを論じることができない経済学者も多かった。

これにたいして私たちは、第二次世界大戦後の「修正帝国主義＝修正資本主義」というシステムのもとでは、資本主義の下にあっても人間発達のがかりが一定の範囲で生まれるものとみた。その背景には、20世紀の前半に二度の世界戦争と大恐慌の惨事の体験をとうして、市場の暴走（恐慌）や国家の暴走（戦争）を規制しようという運動が、未曾有の盛り上がりを示したことがある。その結果、国際連合が形成され、「古典的な帝国主義」時代を律してきた国際関係のルールに一定の修正が施された。植民地主義の崩壊と符節をあわせて「修正帝国主義」のシステムが形成されたのである。内政面でも一定の変化が生まれ、市場の失敗（大恐慌）を繰り返さないために、労働組合が公認され、完全雇用法が制定され、福祉政策が拡充された。このように19世紀型のむきだしの資本主義システムは、いくつかの点で修正され、福祉国家的要素をかかえる「修正資本主義」の体制が構築され、「資本主義の黄金期」を支えたわけである<sup>1)</sup>。

主体形成についての先の主観主義と客観主義の見解については、ともに視野を生産力と経済の枠内に限定したために生まれたあだ花であり、一面的な見解だと私たちは考えた。主体形成を論ずるばあい、視野を工場法や政治・文化の領域にまで拡張する必要があり、どのような質の民主主義、どのような質の生産力があるばあいに、主体形成＝人間発達を促進しやすいのかを具体的に探究すべきだと、私たちは提唱した。この点は、経済学を前進させる積極的な貢献であった。「資本主義の全般的危機」論を前提にした国家独占資本主義といった一面的な議論を、私たちは比較的早く脱することができたのである。

これまでのマルクス経済学的な分析は、どうしても人間を個人としてはではなく、「階級」としてとらえることに急なあまり、個人としての生きがいや個人としての人間発達の問題を軽視する傾向があった。その点で、個人としての全面的な発

達の道を模索するなかで、社会システムの改革を考えていくという経済学の体系を提起したのは、「人間発達の経済学」の斬新な特徴であった。

しかし他面その反動として、近代経済学の人間モデル——「自分だけ、今だけ、お金だけ」というホモ・エコノミカス（経済人）の立場に接近し、その前提のうえで経済学を考えようとする傾向が生まれることになった。哲学的な人間観のうえで、唯物論を捨てて観念論の陣営に移る動きが生まれてきたのである<sup>2)</sup>。最近私が、唯物論的アニミズム（自然の弁証法的理解）の人間観の立場を明確にし、そのうえで経済学を形作ろうと呼びかけるようになったのは、そのためである。

それはともかく、「生き生きした直観（現場体験）と基礎理論（座学）」を軸に経済研究を推進していこう、「一人称の経済学」を創ろうという基礎研の研究運動論は、魅力的であった。ソ連の解体などの時代の暴風雨のなかで飛ばされずに、私は、それなりの活力を保ちつつ「研究者」として生きぬくことができた。その秘密というか、原動力とは何であったかと問われたとすると、基礎研の「人間発達の経済学」との出会いをあげたいと思う。それだけの魅力と吸引力を有した仕事であったことは間違いない。

## 人間発達の経済的基盤を問うことの大切さ

ただし今日の時点からふりかえってみると、なおいくつかの弱点を残していたように思われる。最大の問題点は、人間発達を問題にしなから、近代の主流派経済学の前提する人間観を批判し、これを乗り越えようとする作業が十分ではなかったことである。周知のように近代経済学は、人間をエコロジー的な土台や社会・歴史の枠組みから切り離し、類（人類・生物）と累（祖先と子孫）から孤立した「近代個人モデル」という枠組みのなかで捉えようとする。そのために、大地・自然が人間を生み出し、「いのち」（身体）が精神（自我）を生み出しているのに、あたかも人間のほうが大地・自然を所有し、精神（自我）のほうが「いのち」（身体）を所有しているかのように考えてしまう。このような近代個人モデルを前提する経済学の立場に立つと、かつての天動説のように「自我」を軸として宇宙が回っているかのように錯覚したり、経済的損得の刺激だけに反応するという

「経済人」モデルが成立するかのように想定してしまうのであるが、このような人間観にたいする批判が十分ではなかった。そのために「大地と宇宙に根を下ろす」なかで「小我」から「深我」・「大我」へと向かい、「自己実現」から「自己超越」へと向かう人間発達の大道が見えにくくなっていった<sup>3)</sup>。

「人間発達の経済学」をどのように発展させるべきかという主題について、すでに私は、「平和の経済学——『くずれぬ平和』をささえる社会経済システムの探求」という論文（『立命館経済学』54巻特別号、2005年10月）で詳細に論じている。ここでは、論じ残した論点にしぼって、いくつか解説的に述べておきたい。

## II 「人間」とは何か

いまにして思うと不思議な気持ちがあるが、「人間発達の経済学」の3部作には、そもそも「人間とは何か」といった自然科学的な最新の知見をふまえた哲学的な考察がない。というよりも、このような「そもそも論」は、共同執筆者たちの多様な哲学的な世界観に委ねられてきたといったほうが正確かもしれない。

「能力」とか「努力」といえば、自分の私有財産という面がでてくるので、純粹に「いのち」と自我（私）の関係をとりあげてみよう。「私」が、「いのち」を所有しているのか、それとも「いのち」が、「私」というかたちをとって現れているのであろう。このもっとも基礎的な命題をめぐる、おそらく執筆者は一致した見解を共有してはいない。私は、明確に後者の立場にたっている。それにたいして池上さんなどは、「身体」（さらには「いのち」）を所有していると考えておられる<sup>4)</sup>。後者の見地に立つ者を唯物論者、前者の立場に立つ者を、観念論者（養老孟司さんの表現を借りると「唯脳論者」）という。

見られるように、「自我」をどう捉えるかをめぐって、観念論的な「唯脳論」の視点と「唯物論的アニミズム（自然弁証法）」の視点とが混在しているわけだ。自然発生的な認識は、放置しておく唯脳論になってしまう。自然発生的な宇宙観が、天動説に落ち着くのと同様に、どうしても「我思う、故に我あり」、故に「我持てり」となっ

てしまうからだ。

しかし、「自我」の発生のプロセスを思い起こしていただきたい。まず精子と卵子とが結合し、「いのち」が産み落とされた後に、意識が発生し、「自我」がうまれてきたのではなかったか。意識が消えた後に、「いのち」がなくなるのではなかったか。その証拠に、意識がなくなった後も、「植物人間」という姿で、「いのち」が長期間持続することもある。

## 宇宙における「いのち」の流れの捉え方

最近私は、「唯物論的アニミズムの世界観の創造」という論文を書いた（『唯物論と現代』36号、05年10月）。拙論では、インド出身のサティシュ・クマールの新著を引用して「我思う、故に我あり」という天動説的な観念論（デ・カルト主義）を離れ、「君あり、故に我あり」という唯物論的な見地に転換することこそが、人間発達の哲学的課題ではないかという問題提起を行った（サティシュの本は、尾関修さん父子の手で昨年翻訳された。『君あり、故に我あり』講談社学術文庫）。

139億年前頃といわれるビッグバンの直後の宇宙には、もっとも単純な元素——水素とヘリウムしか形成されていなかったといわれる。核融合を起こして、より複雑な元素をつくりだすためには、大変な高熱がいるからだ。原始星がつぶれて、最後に爆発的拡散をおこすようになると、その熱の力で、ようやく炭素・鉄といったより複雑な原子核をもつ元素が生み出され、超新星の爆発の際には、もっと複雑な原子核をもつ金や銀が生み出されたという。その土台のうえに分子の有機結合体（有機物質）が生まれてきた。「君たちは、星のかけらだよ」<sup>5)</sup>と天文学者が説くには、道理がある。

地球上の海のなかで、36億年近くまえに最初の生命体が生まれたといわれる。その後の26億年間は、細胞分裂という無性生殖が、生命の繁殖の唯一の方法だった。そこでは個体の死はなく、細胞分裂による永遠の生を、原始生物たちは謳歌してきた。雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を生み出すという有性生殖がはじまって、個体の死が始まった。生物は、セックスの遊びを味わう代償として、死の恐怖を味わうようになった<sup>6)</sup>。

それはともかく、有性生殖の積み重ねのなかで、

子供に引き継がれるDNAはいっそう高度で複雑なものになり、その精華として人類が誕生する。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに、「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」が生み出されたのである。

一人の人間のなかに60兆の細胞がすばらしい協同の活動をして、人間活動を支えている。よく生物学者は、「人間とは36億年のDNAだ」と述べるが<sup>7)</sup>、一人のなかに含まれるDNAの総延長は、1,080億キロ——地球と太陽を360回往復する長さになるという。ビッグバン直後の水素とヘリウムしかない状態から、宇宙の物質系は、ここまで進化をとげてきたのだ。「いのち」はなぜ尊いのか。わけても人の「いのち」は、なぜ尊いのだろうか。60兆の細胞が、1千億キロのDNAに導かれて、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからではないか。宇宙自体が、ついに自らの姿を捉える眼と耳をつくりだした、まさにその眼や耳が、私たち一人ひとりの人間だからだ。

### Ⅲ 人間の発達とは何か

「地球村」というNGOの高木善之さんが説いているように、36億年という進化の歴史のなかで、生物たちは、生存持続のための掟を育んできた。「必要最小限という掟」と「調和・共生という掟」が、それだ。動物たちは互いに必要最小限の資源・獲物しかとらず、他の動物たちとの無用の争いを避けてきた。これが、いわば自然の掟（自然法）であった。

しかるに、人間は、300万年ほど前に、アフリカ大陸の密林から草原に降り立ち、二本足歩行をするようになり、社会を形成するようになった。そのなかで自らが自然的動物であることを忘れ、自らを家畜のような安楽状態にし、体を脳化していったのだ。そして自らを自然の外部に置き、自然法に反する「社会の掟」を作るようになった。「不必要最大限という掟」と「競争という掟」がそれであった。まさに自然法とは正反対の内容であった。

ミヒャエル・エンデの『モモ』という童話を読まれたことがあるだろうか。「灰色の紳士たる時間どろぼう」と闘い、盗まれた時間を人間にとり

かえてくれた不思議な女の子——モモの物語だ。「灰色の紳士」とは、「経済人」を人格化したもの。同じ自己実現という言葉を使っても、「灰色の紳士」にとっての「自己実現」とモモにとっての「自己実現」とは、大きく異なる。前者にとっての実現すべき「自己」とは何か。それは、手（社会）と身体（自然）から切断された指先であり、ビリヤードの球（経済人）にすぎず、いのちのない、中身のない「自己」である。したがってこのような「自己」を実現しようとする内発的なエネルギーは生まれてこない。他人（ボス）からの評価（裁き）と競争から脱落するという恐怖心だけが動力源となる。ビジネス書で説かれる「自己実現」とは、このような内容のない、死に物の「自己」実現であることが多い。

これにたいしてモモのばあいの実現すべき「自己」とは何か。「自己」とは、指先のちっぽけな存在だとしても、手・身体・大地とつながった躍動する生命体の一部である。指先（自我）は身体と結びついており、身体は、土台としての家族と「バイオ・リージョン」（人間と生物・非生物がともに作り上げる生命循環系の地域）に根ざしている。

モモのような生命力の豊かな子どものばあい、「自己」の範囲は、成長につれて自然と拡張していくものである。米国の未来学者のヘーゼル・ヘンダーソンによれば、赤ん坊から幼児の時代には、自己利益にかかわる「自己」の範囲は、文字通り本人一人だけだ。要求を貫くために、あたりかまわず泣き叫ぶ赤ん坊の姿を思い浮かべてほしい。通常の人々のばあい少年期になると、家族が「自己」利益の範囲に入ってくる。青年期になると、「自己」の範囲がコミュニティや企業団体まで広がってくる。成熟期に入ると、民族や国家まで「自己」の範囲に入り始める。さらに視野が広い人のばあいは、動植物や死んだ人、未来世代、地球の運命までが「自己」のなかに入ってくるだろう。「地球市民」から「宇宙市民」への「自己」の拡張を論じるヘンダーソンの議論は、「正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである」とうたう宮沢賢治の境地と通底している。

これにたいして新古典派経済学というのは、幼年期の発達段階の「自我」（小我）に照応した経済学だと彼女は述べる。幼年期を超えて人間が

「自己」を拡張し、発達をとげていく展望を閉ざしているからである。

#### IV 財本来の「固有価値」とは何か ——「唯脳論」的解釈を超えて

池上さんは、この本のなかで、「市場にだされる」「かけがいのないオンリーワン」のパンや「住職の愛情がたっぷり詰まった」「おいしい野菜」などを材料にして、財貨の文化的・芸術的な「固有価値」を見出し、評価するのは、消費者の享受能力である、という議論を展開している。いいかえると財貨に内在する「潜在能力」（人間発達を促進しうる能力）を見出し、これを消費できる人間の「享受能力」（味覚能力・サロンを楽しむ能力など）との出会いを軸にして、商品の使用価値論を再構成しようとしている。しかしこのような議論は、使用価値論の個人主義的で観念論的な展開の一典型であろう。

財貨の使用価値論を展開することは、大変重要な意義があるのは間違いない。しかし第一になされるべきことは、その使用価値とは、人間の生を伸ばすのに必要なものか、生を退化させるものか。生命の源、ないし人権の基盤として、市場財にしてはならないものなのか、市場化を許してもいいものか、といった判断をなすことであり、いずれであるかを評価するうえで決定的に大事なものは、消費者の主観的な享受能力ではなく、その財の本性の唯物論的な分析なのである<sup>9)</sup>。

財貨のなかには、いかに美味しく、芸術的に優れたビンのなかに入っている、体に有害なコココーラのような飲み物がある。長年、薬や注射に頼らないで子どもたちを治療している小児科医の真弓定夫先生の監修したマンガ5冊セット——「牛乳はモー毒」、「白砂糖は麻薬」、「肉は危ない」、「ごはんはえらい」、「子どもは病気を食べている」を読むと、食品の使用価値の本性の分析こそが決定的に重要だということに気づく。これらの本の普及に努めている、きくち・ゆみさんは、こう語っている。「これを子どもたち（5歳とまもなく6歳）と一緒に読んだところ、箸をおいてよく食べ物を噛むようになったり、甘いものをむやみにほしがらなくなったり、手作りのお菓子（甘酒や黒砂糖やはちみつなどで自然な甘みをつけたもの）

を一緒につくろうとしたり、と良い変化が起きた」と。

灰谷健次郎さんも、『太陽の子』という小説のなかで登場人物に「むかしはくだらんものに凝ったな……人間の暮らしに必要なものとそうでないものとの区別がつかなんだ。それがわからん人間はわやになるね。沖縄の人はえらいね。そこがちゃんとしとるさかい、人間の中でも上等が多い」と語らせているが、「人間の暮らしに必要な使用価値」とはなんだろうか。この問いに答えるには、科学の智慧・人類の叡智でもって答える以外はない。

その一つのヒントを日系カナダ人のディヴィッド・スズキが与えてくれる。1992年にリオ・デジャネイロで開かれた地球サミット総会の席上、子ども代表として演説したセヴァン・カリス・スズキの父親だ。人類の生命を支える根源的な要素として、古代ギリシア人の強調した4要素——①空気（風）、②水、③土壌（食料）、④火（エネルギー）のほかに、彼は、⑤生物の多様性、⑥愛（家族とコミュニティを担い手とする）という2つの要素をあげ、これら6要素の均衡ある存在が決定的に重要だとしている<sup>9)</sup>。これらの6要素は、生命の尊厳（人権）の基盤であり、基本的な人間的欲求であり、もっとも重要な「サブシステム」（個体とその集団が生命を維持し、本来性を発現し、類として永続しうるための諸条件の総体）なのだ。単純に商品視して、市場に任せてはならないものなのである。

#### V 「得するから動く」から 「正しいから動く」への転換

立命館総長を務めていた末川 博さんは、かつて「未来を信じ、未来に生きる」、そこに若者の特質があると述べて、若者を激励したことがある。同様にカウンセリング科学の開拓者となった人間性心理学者のアルフレッド・アドラーも、未来志向の「目的論にたつ心理学」を構築しようとした。アドラー心理学上級セラピストの野田俊作さんは、次のように解説している。「過去の原因というものを探っても、現在のこの子を救済するのにそれほど役に立たないのです。……唯一アドラー心理学は、目的論に立つ心理学です。すなわち、人間

の行動にはすべて目的がある。その目的は無意識的なものかも知れません。……たとえば登校拒否という行動を見るならば、その登校拒否の目的はいったい何であるのか、このことを考えると、必ず解決策が見つかります。……目的は、過去にではなく未来にあるからです。過去を変えることはできませんが、未来を変えることはできます。もう一つ、目的は、問題を起こしている子どもの外側ではなく、その子自身の中にあるからです。目的はその子の頭の中にあります。ですから、その子と会うことができるかぎり、変えることができます<sup>10)</sup>と。

ビリヤードの球や天体のような「死に物」は、初発の原因条件がわかれば、あとはニュートン力学の公式に当てはめると、未来の運動の軌跡を正確に予知することができる。新古典派経済学のばあいも人間を「ビリヤードの球」のような経済人だと仮定することで、ニュートン力学の助けを借りて、未来の予知ができるという科学性を誇ることができた。しかし人間が、「自分だけ、今だけ、お金だけ」の力で動くという「経済人」モデルから脱して、自由人・文化人・変革主体として発達することができれば、その範囲で、未来の運命は、当該の人々の自由意志で定めることができるようになる。基礎研は、資本主義の土台の上でも、むきだし資本主義のルールを修正することができれば、未来を主体的に選ぶとすることができるし、その範囲で「政策科学」的な展開というか、目的論に立つ経済科学の展開が可能だと考えた。その意味で人間発達の経済学は、アドラー心理学と同質の役割を果たしてきたといつてよい。

## VI エーリッヒ・フロムに学ぶ 「人間発達の経済学」の発展方向

### 「所有」への拘泥を超える

私が若い頃愛読していた思想家のなかに、エーリッヒ・フロムがいる。ナチスの迫害から逃れて亡命してきたユダヤ人の社会心理学者だ。最近、彼の『生きるということ』（紀伊国屋書店、1977年。原題は、To Have or to Be?, 1976）という本を再読する機会があった。フロム76歳のときの作品だが、私とほとんど同じ境地に達しているこ

とが分かり、感動した。

フロムはこう述べている。「私（脳に宿る自我）が、体（いのち）・大地・自然を支配し、所有している」というのが近代人の典型的思考だ。近代人は、「眠ることができない」といわずに「不眠症をもっている」、「恋人がいる」というかわりに「恋人をもっている」と考える思考法に染まってきた（フロム『生きるということ』邦訳、42-43頁）。本来「もつ＝所有する」とは、100%支配すること。自らで作ったものや「死に物」は、たしかに100%支配できよう。しかし恋人や大地というのは、「宇宙における命の流れ」の一部であり、人間（脳）が製作したものではない。支配・所有したいと妄想しても、できない相談だ。人間ができることといえば、彼らと一緒に「生命の舞踏」の輪に加わり、交流し、「君あり、ゆえに我あり」という認識を深めることだけである。

「もつ様式」への固執を解消し、「ある様式」に移っていくことをフロムは、「人間発達」の自然な大道だと論じているのだ。

しかし自らの非力におびえるあまり、自然や人間まで所有しないと安心できないとする近代人が陥るパニックの症状が、「幼児愛好」や「ネクロフィリア」（屍体愛）という性向である。この角度からフロムが『破壊——人間性の解剖』（紀伊国屋書店）という労作で、あるいはアリス・ミラーが『魂の殺人』（新曜社）という名著で展開しているヒトラーやスターリンの精神分析は秀逸であった。

### 「ある様式」への転換を容易にする五つの経済条件

社会全体の「ネクロフィリア」度を減らし、非暴力的で健康な「バイオフィリア」（自然な生命愛）を増やすためには、どうしたらよいのか。「もつ様式」への執着度を減らし、「ある様式」に転換していく以外にないとフロムは論を進める。しかし江戸時代に「生類哀れみの令」を出した將軍綱吉や中国で文化大革命を発動した毛沢東の失敗をみると、道徳律と思想動員だけで、このような生活様式の転換を行うことはできない。「徳が得になる」——転換しても経済的に損しない、むしろ得をするという条件を整えていくことが絶対に必要なのである。とすれば「ある様式」への転換を容易にするには、どのような社会経済的条



件が必要なのだろうか。フロムの主張を要約してみると――

第1に財貨の「固有価値」の唯物論的探究だ。フロムはこう述べている。「何が生命を促進し、何が生命を害するかを検討するために、……食品安全局がなしたことをはるかにしのぐ研究を行わなければならない。……どの要求が私たちの有機体に起源を発しているのか。どれが文化過程の結果なのか。……どれが病理に根ざし、どれが精神的健康に根ざしているのか」の探究こそが必要だと（フロム、邦訳、236頁）。

第2に、「正気の消費のための一大教育運動を進め、……消費の型を変えて」いく課題だ。消費者ボイコットの運動を展開し、企業の社会的責任を問う運動を展開しよう。「正気の消費は、大企業の株主や経営者が企業の利益と発展のみに基づいて生産を決定する権利を、大幅に制限しえたときに、はじめて可能となる」からだとしてフロムは述べる。

第3に、参加型民主主義を徹底していくことだ。そのための一つの方法をフロムは提案している。600名ほどの有権者からなる住民総会を全土に無数に設置せよとフロムは提案している。地域の有権者全員が参加できる住民総会を全土に無数に設置し、総会を適宜開き、十分な情報を与え、深い討論を体験したうえで、政治課題について投票するようにせよというのだ。スイス古来の住民総会は有名だが、かりに数十万箇所で開催しても、IT技術を使うと、その議論と投票の結果は、すぐに集計できるだろうし、浅薄な人気投票に民主主義が墮すことを防げるだろう。その結果、国民はもっと深い政治認識を我が物にし、徹底民主主義が実践できるだろうと、フロムは論じている（邦訳、242頁）。

第4に、生存権保障の鍵として、「年間保証収入」という制度の導入を提案している。小沢修司さんや村岡 到さんが紹介されている「基礎所得」（あるいは「市民所得」）保障と同じ構想なのだが<sup>11)</sup>、フロムは、すでに1955年出版の『正気の社会』の段階で提案していたのだ。ただし彼には「家庭菜園」という形での大地保障＝自然との再結合の提案が欠けているのが残念であるが<sup>12)</sup>。

彼はこう書いている。この制度は、「人間は『社会への義務』を果たすかどうかにかかわらず、生きるための無条件の権利をもつ、という規

範」のメッセージである。「ペットには認めながら、同じ人間には認めてこなかった権利」が、ここで公認されるだろう。「個人的自由の領域は、このような制度によって途方もなく拡大される。ほかの人間（たとえば親・夫・社長）に経済的に依存している人でも、もはや飢えの脅しに屈服することを強いられないし、天賦の才能を持っていて、違った人生を送る準備をしたいと思う人物も、しばらくある程度の貧しい生活を忍ぶ意志さえあれば、そうすることができる」ようになるだろうと（邦訳、261頁）。

最後に第5の条件であるが、「もつという様式」を進んで放棄するための文化的な基盤づくりの問題だ。「自己および同胞の十全な成長を、生の至高の目的」とし、「自分がすべての生命と一体であることを知り、その結果、自然を征服し、……破壊するという目標を捨て、自然を理解し、自然と協力する『正気の人』になってほしい。そのためには、近代人の中で自然観の革命を引き起こし、「神なき宗教性」に目覚めることが必要だと彼は述べ、こう続ける。「宗派もなく、教義も制度もないヒューマンズ的『宗教性』、……仏陀からマルクスにいたる非有神論的『宗教性』」を培っていく必要があると（邦訳、265頁）。自然を崇拜する心を育て、「神なき宗教性」を養うべきだというフロムの指摘は、「唯物論的アニミズムの世界観の構築」を説く私の見地と通底している<sup>13)</sup>。

## スピリチュアリティとは何か

スピリチュアリティを霊性ではなく、「零性」と表現すべきだというご指摘を松尾光喜さんからいただいた。まさにそのとおりだと考える。養老孟司さんが批判されている「唯脳論的な考え方」というか、己の脳髄を軸にして宇宙がまわっているという天動說的観念論の考え方のパワーをゼロにすることなのだ。人間を生物的本性――「いのち」がまず先にあって、「いのち」が、脳をもった自分という姿をとって存在しているという「自然の掟」の真実に気づくことだと思う。脳が肉体、大地を、さらには宇宙における「いのちの流れ」さえも所有しているという天動說的観念をゼロにしたときに、自然の本当の姿を悟ることができる。ちょうど司馬遼太郎が、西郷隆盛に語らせているように、「自分を愛することがなければ、物事がよく見えてくる……自己を忘れれば天の心にちか

くなり、胸中が天真爛漫としてきて、あらゆる事や物がよく見えるようになった」（司馬遼太郎『翔ぶが如く 二』文芸春秋社）というわけである。

自然体としての自己を取り戻すことができれば、その人は、自然体のなかに眠る潜在的能力を最大限に発揮できるようになる。映画監督の龍村仁さんは、『ガイア・シンフォニー』という映画のなかで、深海100メートルまで素潜りをした記録をもつジャック・マイヨールを登場させている。龍村さんによれば、魚は脈拍を格段に落とすことで、深海での生活に適応している。これにたいして自意識が過剰な人間は、潜るほどに緊張を高め、脈拍数を増やしてしまうため、酸素不足に陥り、10メートルも潜ることができない。ところがマイヨールのばあい、「普段毎分60回である脈拍数は、水深100メートルのあたりでは、毎分30回に落ちている。圧縮されて働かなくなった肺にかかわって肝臓や脾臓から直接に脳や心臓にむかって、不必要な場所に残っている赤血球を送りこむ血流が生まれている。活性化した細胞や組織が『私』の意識を通過せずに、自然に、生き続けるための最大限の力を発揮している」と。深く潜るコツは、過剰な自意識から自己を解放し、自然（＝魚）の摂理に同化することなのだ<sup>14)</sup>。

## VII おわりに — 「マルクス・レノン主義」の可能性 —

世界史を振り返る時、19世紀のようなむき出しの資本主義・帝国主義の時代には、搾取され抑圧された世の多数者にとって、権力を獲得する革命の前には社会の主権者・変革主体に成長しうるような人間発達の基盤がないことが普通であった。このような時代に革命を行おうとすれば、少数のエリート革命家による軍隊的規律にもとづく突撃戦こそが、権力奪取のほぼ唯一（一時期の英米を除いて）の道であった。このような条件下で生まれてきたのが「マルクス・レーニン主義」だったといつてよい。

20世紀のとくに後半に入ってくると、むき出しの資本主義は程度の差はあれ一定の修正をうけ、「修正資本主義」（「国家独占資本主義」といった不正確な用語で呼ばれた時もあったが）、「修正帝

国主義」の時代となった。現在「修正資本主義」から「むき出し資本主義」「新帝国主義」への歴史的逆行の時代が始まっているが、住民の多数者が非暴力による変革主体に成長しうる条件はまだ残されている。このような人間発達のための条件は最大限に活用すべきであろう。

## 人間発達の到達目標としてのレノンとガンジー

昨年12月8日は、ジョン・レノンが暗殺されて25年目の記念日だった。この日、彼を追悼して全世界で「イマジニ」が歌われた。その一カ月後の06年1月、「自分だけ、今だけ、お金だけ」という「経済人」モデルの「若きアイドル」であったホリエモンが逮捕され、「虚飾の王国」ライブドアは瓦解した。2月に入るとイタリアのトリノで冬季オリンピックが行われた。開会式でジョン・レノンのパートナーであったオノ・ヨーコが「イマジニ」を歌い上げた。「想像してごらん 神様なんていないってことを……そしてすべての人が平和に暮らしていることを」と。このメッセージは、トリノの観客だけでなく、テレビを通じて世界中の人々の心をしっかりとつかんだと思う。

ディープな修正資本主義が形成され、「唯物論的アニミズム」の世界観が人々に受容される程度におうじて、レノン（ガンジー）とマルクスとの統合が可能になってくるのではないだろうか。憲法9条を宮沢賢治の言葉で語れるような「マルクス・レノン主義」が形成されたとき、日本でも政治的な地殻変動が生まれてくるのではないか<sup>15)</sup>。第2次大戦後、世界の社会民主主義政党は、浅薄な質の「修正資本主義」を作ろうとして、「大きくて不効率な国家」を作ってしまった。このような「国家の失敗」をも乗り越えた「ディープな修正資本主義」を形成する道を歩んでいったとき、その先に「搾取のない持続可能な共生社会」という巨峰が遠望されてくるのであろう。このような展望を語る新ヴァージョンの「人間発達の経済学」を創っていきたいと思う。

### 注

- 1) ただし基礎研の内では、国家独占資本主義という伝統的な把握をきっぱりと清算する営みが自覚的に行われたとはいいがたい。むしろ、いつしか「捨てられた」といったほうが正確ではないだろうか。

このような事情があるので、小泉「構造改革」にたいする見方が甘いというか、「むきだし資本主義」への回帰運動にたいする警戒心が弱くなっているのではないかと危惧するしだいである。詳細は、藤岡惇『グローバルゼーションと戦争』2004年、大月書店、17-22頁を参照。

- 2) 百年前に同様の危機に直面してレーニンが、こう書いたことがある。「新しい物理学が観念論にまよいこんだのは、……物理学者が弁証法を知らなかったからであった。……今日の『物理学的』観念論は……自然科学者の一学派が、形而上学的唯物論から弁証法的唯物論へまっすぐにすぐさまのぼることができなかったの、反動哲学へ転落したことを意味するにすぎない。……現代物理学は産褥にある。それは弁証法的唯物論を産もうとしている。」レーニン『唯物論と経験批判論』邦訳全集版14巻、大月書店、315・378頁。シェリングの研究者の西川富雄さんも、私と類似した視点にたつて「自然を主体にした哲学」を考えておられる。西川富雄『環境哲学への招待——生きている自然を哲学する』2002年、こぶし書房、59、86-89頁参照。西川さんの哲学的源流として、梯 明秀『物質の哲学的概念』、『全自然史的過程の思想』の今日的再評価も急務であろう。関連して山尾三省『アニミズムという希望』2000年、野草社も参照。
- 3) 資本主義的土台のうえでも、どのような生産力、どのような質の民主主義があるばあい、人間発達＝「歴史の創造」主体形成が促進されるかというテーマを私が最初に自覚的に論じたのは、拙稿「民衆発達の経済史を求めて」『経済科学通信』39号、1983年であった。この論文では、江口朴郎さんの民衆の統治能力発達史観と基礎研の人間発達の経済学とは同質の提起であり、もっと交流しあう必要を提唱していた。ただしその3年後の1986年に公刊された池上 惇『人間発達史観』（青木書店）には、深い違和感を感じた。池上理論を含む基礎研の共同研究の到達点にたいする私の批判的コメントについては、藤岡 惇「近代個人主義の人間観をどう超えるか」『経済科学通信』78号、1995年4月、60-64頁、藤岡惇「エゴからエコへ——「自己」の拡張と人間の発

達」『経済科学通信』93号、2000年4月、58-66頁を参照されたい。

- 4) 池上・二宮『人間発達と公共性の経済学』39頁。  
 5) 佐治晴夫『宇宙の風に聴く——君たちは、星のかげらだよ』1994年、かたつむり社、44頁。青木和光『物質の宇宙史』2004年、新日本出版社。  
 6) ウィリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』97年、三田出版会。田沼靖一『死の起源——遺伝子からの問いかけ』2001年、朝日新聞社、26-27頁  
 7) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と、たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社、1991年、6頁）  
 8) 中村共一「使用価値の公共性——『固有価値』論批判」『社会文化研究』8号、2005年、125頁。  
 9) ディヴィッド・スズキ『生命の聖なるバランス』2004年、日本教文社。  
 10) 野田俊作『続アドラー心理学トークンセミナー』1999年、星雲社、156頁。  
 11) 小沢修司『福祉社会と社会保障改革——ベーシック・インカム構想の新地平』2002年、高菅出版、村岡 到『社会主義はなぜ大切か』2005年、社会評論社、204頁、ジェームズ・ロバートソン（石見 尚訳）『21世紀の経済システム展望』99年、日本経済評論社も参照。  
 12) 未来社会づくりの展望のなかで菜園家族の形成をどう位置付けるかについては、小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族——21世紀の未来社会論』2004年、人文書院、小貫雅男『菜園家族レポリューション』2002年、社会思想社が示唆的である。  
 13) 詳細は、拙稿「唯物論的アニミズムの世界観の構築」『唯物論と現代』36号、2005年11月。  
 14) 龍村 仁『ガイア・シンフォニー間奏曲』53頁、ジャック・マイヨール『海の記憶を求めて』1998年、翔泳社を参照。  
 15) 伊田広行『スピリチュアル・シングル宣言——生き方と社会運動の新しい原理を求めて』2003年、明石書店、も同様の問題意識に立っている。  
 （ふじおか あつし 所員 立命館大学）